

原 著

選手の自主性と指導者のリーダーシップに対する認識の関係

倉藤利早*1 田島 誠*2 米谷正造*2 松枝秀二*3

要 約

倉藤・田島・米谷は、指導者のリーダーシップが選手の自主性に及ぼす影響について検討し、指導者のP機能またはM機能が低いほど、選手の自主性も高いことが示された。しかし、選手の自主性によってリーダーシップの認識が異なることが考えられる。そこで、本研究では、チーム内における選手の自主性と指導者のリーダーシップに対する認識の関係を検討することを目的とした。指導者のいるサッカー部10チームに対して調査を依頼し、有効回答数は220名であった。結果より、全体で一貫した結果は得られなかったが、部員数が多く、かつ競技レベルが高いチームにおいて、選手の自主性得点とP得点、M得点の間に正の相関関係が示された。そこで、チームの部員数とP得点、M得点の相関係数を算出した結果より、部員数とP得点、M得点の間に負の相関関係が示された。以上の結果より、部員数が多くかつ、競技レベルが高いことが指導者の選手との関わりの量や質に偏りを作っていることが考えられる。そして、自主性の高い選手は自主的に指導者にアドバイスを求めるため指導者との関わりが多く、P得点、M得点が高く示され、自主性の低い選手は自主的に指導者にアドバイスを求めないため指導者との関わりが少なく、P得点、M得点が低く示されたことが考えられる。また、競技レベルが高い部活動における自主性の高い選手は、試合で勝つために自主的に自身の技術力を磨くという意識が強いと考えられ、指導者からよりよいアドバイスをもらうために、指導者と多くの関わりをもとうとする。一方、自主性の低い選手は自主的に行動せず、選手自身から指導者に関わろうという意識が低いため、指導者との関わりが少ないことが考えられる。以上のことから、部員数が多く、かつ競技レベルが高いチームにおいては、選手の自主性の違いによって指導者のリーダーシップに対する認識が変わってくることを示唆された。

1. 緒言

現在、学校における教師と生徒の指導場面において、生徒は教師に言われたことは行うが、自ら考えて行動することができないといった事態が見うけられる。また、職場での上司と部下の関係においても同様のことが伺える。石井はこれを「指示待ち症候群」と呼んでおり¹⁾、学校や職場の教師と生徒、上司と部下といった関係のある社会的な場面で、「指示待ち症候群」が問題視されている。このような、自分の意思で行動できず、人の指示でしか行動できない状態になることは、児童・生徒の人間の成長や人間性の形成の妨げになることが考えられるため、「指示待ち症候群」を回避する必要性が考えられる。

児童・生徒の精神的発達における先行研究より、駒米は、「教師の持つ人間観が指示・指導を通して児童・生徒の成長発達に大きな影響を与える」と指摘している²⁾。また、松本は、子どもの心に関係した問題は単に、子どものみの問題ではなく、子どもを取り巻く環境、特に、人的環境に関係した問題が多いとしている³⁾。以上のことから、「指示待ち症候群」を引き起こす背景として、親（親族）や教師などの周囲の影響が考えられ、また、部活動における指導者からの影響が考えられる。

一方、スポーツ指導場面での指導者のリーダーシップについての先行研究において、「監督・コーチの型にはめた指導」、「個性を考慮しない指導」、「本人の希望や特徴を無視した指導」、「自

*1 川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 健康科学専攻 *2 川崎医療福祉大学 医療技術学部 健康体育学科

*3 川崎医療福祉大学 医療技術学部 臨床栄養学科

(連絡先) 倉藤利早 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-Mail : w8511003@kwmw.jp

分のものを押しつけ、選手を押さえつける指導」といった、指導者が威圧的なリーダーシップをとる場合、これらの指導は選手にとってマイナスに働き、反発する力が生まれるだけで本来の自主性を育成することは難しいだろうと指摘している⁴⁾。また、指導者の「教え過ぎ」、「鍛え過ぎ」、「期待し過ぎ」、「結果のこだわり過ぎ」のような過度な教え過ぎや与え過ぎな指導行動が望ましくないという警告を与えた。そして、これらの指導は指示しなければ何をやっていいかわからないという「指示待ち症候群」を生むと指摘している⁵⁾。

そして、「指示待ち症候群」の他者からの指示があれば行動できるが、自分の意思で物事を判断、選択し行動することができないという特性から、「自主性」が「指示待ち症候群」と深い関係性があると考えた。石井は、「指示待ち症候群」を生む要因として、生活が豊かになってハングリー精神がなくなり、教師や指導者や親があまりにも過保護でかつ環境が設定され過ぎている結果、強制や束縛を嫌がる子どもたちがスポーツも自分自身で進んで「やる練習」から指導者が与えて「やらされる練習」に変わったため、自主性が欠け、指示待ち症候群を生むと指摘している¹⁾。このことから「指示待ち症候群」は「自主性」と関係が深いことが考えられる。以上より、指導者のリーダーシップのタイプにはさまざまなものが存在し、指導者のリーダーシップが選手の自主性に影響している可能性が考えられる。特に、体育系の部活動において、指導者の「教えすぎ」、「結果にこだわり過ぎ」など、競技成績を重視した指導方法の場合は選手が自ら考えて行動する必要がないため、効率のよい行動を起こしやすいと考えられる半面、選手の自主的に行動する機会が減ると考えられる。また、指導者の「ただやればいい」、「楽しければ何でもいい」、「好きな事だけをやればいい」など、何も重視しない指導方法の場合は、選手がやりたい事を自由に行える機会が増えると考えられる半面、やりたい事だけを行い、やりたくない事は避ける機会を増やすと考えられる。

しかし、先行研究において、指導者のリーダーシップが選手の自主性に及ぼす影響について検討されたものはない。そこで、倉藤・田島・米谷は、「指示待ち症候群」を「他者からの指示があれば行動できるが、自分の意思で物事を判断、選択し行動することができない人」と定義し、運動部指導者のリーダーシップのタイプが選手の自主性に及ぼす影響を明らかにするために、指導者のリーダーシップをPM指導行動タイプ別に分け、指導者のリーダーシップが選手の自主性に及ぼす影響を検討した。そ

の結果、指導者のP機能またはM機能が低いほど、選手の自主性も高いことが示された。そして、指導者のリーダーシップのタイプが選手の自主性に影響を及ぼしており、特に、PMタイプの指導者が選手の自主性を向上させることが示唆された⁶⁾。しかし、選手がタイプ分けを行った指導者は選手によってそれぞれ異なるため、同じ指導者から指導を受けたすべての選手が、指導者のリーダーシップを同じように認識するとは限らず、選手の自主性によってリーダーシップの認識が異なることが考えられる。

そこで、本研究では、倉藤らの研究を踏まえ、同じ指導者に指導されたすべての選手にPM指導行動測定尺度と自主性尺度を回答させ、チーム内における選手の自主性と指導者のリーダーシップに対する認識の関係を検討することを目的とした。

2. 方法

2.1 対象者

指導者のいるサッカー部、大学5チーム、高校5チームに対してアンケートを依頼した。さらに、このアンケートに参加することは自由であることを書面にて説明を行い、インフォームドコンセントを得られた226名を対象に行った。有効回答数は220名(97.3%)であった。それぞれのチームごとの対象者数と有効回答数(有効回答率、平均年齢)は、Aチームの対象者数16名のうち有効回答数は16名(100.0%, 19.5±1.9歳)、Bチームの対象者数47名のうち有効回答数47名(100.0%, 20.5±1.1歳)、Cチームの対象者数62名のうち有効回答数は57名(91.9%, 19.9±1.3歳)、Dチームの対象者数16名のうち有効回答数16名(100.0%, 19.6±1.0歳)、Eチームの対象者数13名のうち有効回答数13名(100.0%, 16.5±0.5歳)、Fチームの対象者数7名のうち有効回答数7名(100.0%, 16.6±0.5歳)、Gチームの対象者数13名のうち有効回答数12名(92.3%, 16.0±0.7歳)、Hチームの対象者数17名のうち有効回答数17名(100.0%, 16.5±0.6歳)、Iチームの対象者数13名のうち有効回答数は13名(100.0%, 16.6±0.5歳)、Jチームの対象者数22名のうち有効回答数22名(100.0%, 20.1±0.9歳)であった。また、対象は大学と高校であり、学校段階が異なりますが、「指導者のいる運動部活動という枠組み」や「選手と指導者の関係」の点において、高校と大学を同等のものとして検討を行いました。

2.2 調査時期及び調査方法

調査時期は、2009年12月から3月の間に実施した。また、調査方法は、郵送法による調査を行った。アンケート用紙の配布及び回収は、研究依頼に

同意が得られた大学、高校に切手を貼付した返信用封筒と共に送付し、調査実施者へ返送するように依頼した。

2.3 調査内容

2.3.1 自主性の尺度

自主性については、井上・沖・林により作成された自主性尺度を使用した⁷⁾。自主性尺度は20項目であり、表1に示した自己統制、独創性、自己主張、独立性、判断力、自発性の6つの因子で構成されている。回答は「当てはまらない」～「当てはまる」の5件法で求めた。項目は各1点～5点で集計し、100点満点として自主性尺度得点とした。

表1 自主性の構成因子 (井上ら, 2005)

| 因子 | 定義 |
|------|---|
| 自己統制 | 自己の欲望に一方的に支配されることなく、その支配から自己を適切に守ろうとする傾向。 |
| 独創性 | 他者とは異なったユニークな存在としての自己を追求すること。 |
| 自己主張 | 自己の価値が他者に認められようとする努力。自己の真の価値を実現しようとする客観的条件が整った場合重要な特性となる。 |
| 独立性 | 他者に不当な依存をすることなく、行動し生活すること。依存構造の発達として捉えられる。 |
| 判断力 | 自己が直面する事態を多方面から分析し、合理的な行動の仕方を見出して適切に対処していくこと。 |
| 自発性 | 他者によって強制された行動ではなく、自己自身の内的欲求に基づいて自発的に行動する傾向。 |

2.3.2 指導者の尺度

指導者については三隅により作成された、PM指導行動測定尺度を運動部活動における選手用に作成し、使用した⁸⁾。回答の際に、対象者に指導者の評価をする上で、指導者の定義を、①監督や顧問、コーチも含む、②実際に指導を行っていなかった監督は除く、③指導を行った人が複数いる場合は、一番中心となって指導を行った人とした。そして、評価対象の時期を統一させる必要があり、2009年の1年間を振り返り、回答するように書面で教示した。この尺度は「課題達成機能 (P機能: Performance function)」と「集団維持機能 (M機能: Maintenance function)」の2要素から構成されている。回答は「まったく当てはまらない」～「とても当てはまる」の5件法で求めた。P行動測定項目、M行動測定項目ごとに各項目を単純加算し、すべてのP得点とM得点の平均値を算出した。

2.4 統計分析

指導者のリーダーシップに対する選手の認識と自主性の関係性を検討するために、チーム別に選手の自主性得点とP得点、M得点の相関関係を算出し、ピアソンの積率相関係数を用いた。また、指導者のリーダーシップに対する選手の認識とチームの部員

数について検討するために、チーム別の部員数とP得点の相関係数を算出し、ピアソンの積率相関係数を用いた。さらに、選手の自主性とチームの部員数について検討するために、チーム別の部員数と自主性得点の相関係数を算出し、ピアソンの積率相関係数を用いた。すべての統計学的有意水準を5%とした。

3. 結果

3.1 平均得点

チーム別自主性得点および自主性因子得点、P得点とM得点の平均得点を以下に示した。

・Aチーム

Aチームの自主性得点の平均得点 (平均値±標準偏差) は、64.9±6.8点であり、自主性因子得点の平均得点 (平均値±標準偏差) は、自己統制13.6±2.2点、独創性12.4±3.7点、自己主張8.8±2.9点、独立性8.3±2.6点、判断力12.1±2.5点、自発性9.6±2.1点であった。また、P得点とM得点の平均得点 (平均値±標準偏差) は、P得点が25.0±6.1点、M得点が25.4±5.3点であった。

・Bチーム

Bチームの自主性得点の平均得点 (平均値±標準偏差) は、65.2±7.3点であり、自主性因子得点の平均得点 (平均値±標準偏差) は、自己統制13.0±2.7点、独創性13.5±2.9点、自己主張9.9±2.3点、独立性6.9±1.7点、判断力11.7±1.9点、自発性10.3±2.4点であった。また、P得点とM得点の平均得点 (平均値±標準偏差) は、P得点が29.2±4.7点、M得点が22.0±7.2点であった。

・Cチーム

Cチームの自主性得点の平均得点 (平均値±標準偏差) は、64.3±8.5点であり、自主性因子得点の平均得点 (平均値±標準偏差) は、自己統制13.3±2.9点、独創性13.4±3.4点、自己主張9.7±2.2点、独立性8.1±2.2点、判断力10.6±2.8点、自発性9.2±2.7点であった。また、P得点とM得点の平均得点 (平均値±標準偏差) は、P得点が25.0±5.4点、M得点が26.4±6.6点であった。

・Dチーム

Dチームの自主性得点の平均得点 (平均値±標準偏差) は、68.2±9.0点であり、自主性因子得点の平均得点 (平均値±標準偏差) は、自己統制14.7±3.2点、独創性12.8±2.4点、自己主張9.5±2.1点、独立性7.9±2.5点、判断力12.8±1.4点、自発性10.6±1.9点であった。また、P得点とM得点の平均得点 (平均値±標準偏差) は、P得点が26.1±3.9点、M得点が29.3±5.7点であった。

・Eチーム

Eチームの自主性得点の平均得点（平均値±標準偏差）は、67.6±9.0点であり、自主性因子得点の平均得点（平均値±標準偏差）は、自己統制13.2±2.7点、独創性12.8±3.8点、自己主張10.5±2.8点、独立性6.9±2.8点、判断力12.8±2.2点、自発性11.3±1.7点であった。また、P得点とM得点の平均得点（平均値±標準偏差）は、P得点が32.7±4.0点、M得点が29.8±2.9点であった。

・Fチーム

Fチームの自主性得点の平均得点（平均値±標準偏差）は、67.7±6.1点であり、自主性因子得点の平均得点（平均値±標準偏差）は、自己統制13.4±2.1点、独創性14.1±2.9点、自己主張10.4±2.7点、独立性7.3±2.4点、判断力11.7±1.6点、自発性10.7±2.2点であった。また、P得点とM得点の平均得点（平均値±標準偏差）は、P得点が29.1±5.8点、M得点が26.3±6.4点であった。

・Gチーム

Gチームの自主性得点の平均得点（平均値±標準偏差）は、63.5±7.9点であり、自主性因子得点の平均得点（平均値±標準偏差）は、自己統制15.0±2.8点、独創性11.5±3.1点、自己主張9.0±1.9点、独立性6.3±2.1点、判断力12.6±1.2点、自発性9.2±2.2点であった。また、P得点とM得点の平均得点（平均値±標準偏差）は、P得点が30.8±2.4点、M得点が27.0±4.2点であった。

・Hチーム

Hチームの自主性得点の平均得点（平均値±標準偏差）は、61.1±6.8点であり、自主性因子得点の平均得点（平均値±標準偏差）は、自己統制13.8±2.6点、独創性11.1±3.3点、自己主張8.6±2.2点、独立性6.6±2.3点、判断力11.5±1.6点、自発性9.6±1.9点であった。また、P得点とM得点の平均得点（平均値±標準偏差）は、P得点が27.1±3.2点、M得点が28.5±4.3点であった。

・Iチーム

Iチームの自主性得点の平均得点（平均値±標準偏差）は、65.3±8.9点であり、自主性因子得点の平均得点（平均値±標準偏差）は、自己統制14.5±2.4点、独創性12.1±3.9点、自己主張8.2±3.1点、独立性7.8±1.9点、判断力12.5±1.9点、自発性10.4±2.0点であった。また、P得点とM得点の平均得点（平均値±標準偏差）は、P得点が30.9±3.8点、M得点が30.9±4.5点であった。

・Jチーム

Jチームの自主性得点の平均得点（平均値±標準偏差）は、65.1±8.4点であり、自主性因子得点の平

均得点（平均値±標準偏差）は、自己統制13.3±2.8点、独創性12.5±3.0点、自己主張10.3±1.8点、独立性8.2±2.6点、判断力11.4±2.4点、自発性9.4±1.7点であった。また、P得点とM得点の平均得点（平均値±標準偏差）は、P得点が30.4±5.0点、M得点が25.4±4.0点であった。

3.2 指導者のリーダーシップに対する選手の認識と自主性の関係

チームごとの指導者のリーダーシップのタイプに対する選手の認識と自主性の関係を検討するために、チーム別に選手の自主性得点とP得点、M得点の相関係数を算出し、部員数と競技レベルを表2に示した。また、競技レベルは、全国大会に出場経験のある選手を「全国」、中国地方等地方大会に出場経験のある選手を「地方」、岡山県等県大会に出場経験のある選手を「県」、岡山県岡山市等地区大会に出場経験のある選手を「地区」と評価した。そして、チーム別に指導者のリーダーシップのタイプに対する選手の認識と自主性得点の関係について検討した。

Bチームの選手の自主性得点とP得点、M得点の相関係数を算出した結果より、選手の自主性得点とP得点の間に弱い正の相関関係が示された（ $r=.311, p<.05$ ）。また、選手の自主性得点とM得点の間に中程度の正の相関関係が示された（ $r=.428, p<.01$ ）。

表2 チーム別部員数と競技レベルおよび自主性得点とPM得点の相関係数

| チーム | 部員数 | 競技レベル | 相関係数 | |
|-----|-----|-------|-------|--------|
| | | | P得点 | M得点 |
| A | 16 | 地方 | .172 | .035 |
| B | 47 | 全国 | .311* | .428** |
| C | 57 | 地方 | .115 | .238 |
| D | 16 | 地方 | -.281 | .278 |
| E | 13 | 全国 | -.230 | .238 |
| F | 7 | 地区 | -.501 | -.504 |
| G | 12 | 全国 | -.245 | .175 |
| H | 17 | 県 | .191 | .333 |
| I | 13 | 全国 | .033 | .523 |
| J | 22 | 地方 | -.094 | -.260 |

* $p<.05$. ** $p<.01$

以上の結果より、全体で一貫した結果は得られなかったが、Bチームにおいて、選手の自主性得点とP得点、M得点の間に正の相関関係が示された。また、チーム別に自主性得点とP得点、M得点の関係を比較して特徴的な点は、他のチームと比較してBチームの部員数が多いことと競技レベルが高いこと

であった。

3.3 指導者のリーダーシップに対する選手の認識とチームの部員数の関係

次に、指導者のリーダーシップに対する選手の認識とチームの部員数について検討するために、チームの部員数とP得点の相関係数を算出し、図1に示した。図1より、チームの部員数とP得点に有意ではないが弱い負の相関関係が示された ($r = -.385$, n.s.)。次に、チーム別の部員数とM得点の相関係数を算出し、図2に示した。図2より、チーム別の部員数とM得点に有意ではないが中程度の負の相関が示された ($r = -.537$, n.s.)。

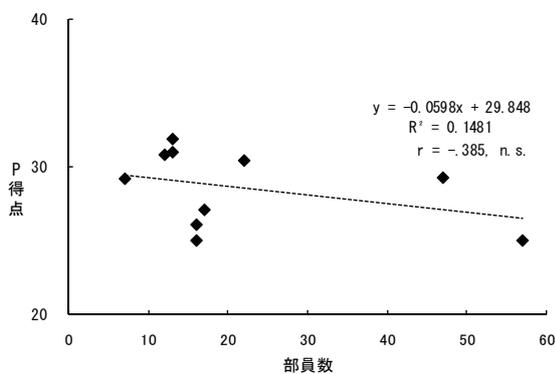


図1 チームの部員数とP得点の関係性

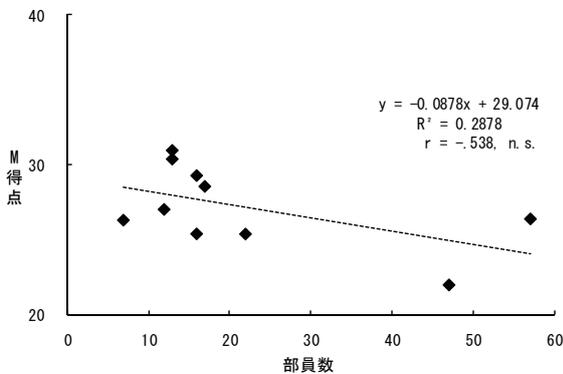


図2 チームの部員数とM得点の関係性

以上の、指導者のリーダーシップに対する選手の認識とチームの部員数について検討するために、チーム別の部員数とP得点の相関係数を算出した結果より、チーム別の部員数とP得点の間に負の相関関係が示され、また、チーム別の部員数とM得点の間に負の相関係数が示された。

4. 考察

本研究は、同じ指導者に指導されたすべての選手にPM指導行動測定尺度と自主性尺度を回答させ、チーム内における選手の自主性と指導者のリーダー

シップに対する選手の認識の関係を検討することが目的であった。

チームごとに、選手の自主性得点とP得点、M得点の相関係数を算出した結果より、Bチームにおいて選手の自主性得点とP得点、M得点の間に弱い正の相関関係が示された。しかし、他のチームにおいて、自主性得点とP得点、M得点の間に相関関係は示されず、全体で一貫した結果は得られなかった。そこで、Bチームとその他のチームで自主性得点とP得点、M得点の関係を比較し、特徴的な点は、Bチームの部員数が多く、かつ競技レベルが高いことであった。Cチームは部員数が多いが競技成績が全国ではなく、Eチーム、Gチーム、Iチームは競技成績が全国だが部員数が少ない。このことから、部活動の部員数と競技レベルによって、指導者のリーダーシップによる選手の自主性への影響が異なっていることが考えられる。西口は、少人数授業のもとでは、教師と子どもの相互作用時間は効率的に増えると指摘しており⁹⁾、このことから逆に、大人数授業では教師と子どもの関わりは減ることが考えられ、部活動における指導者と選手の関わりも先行研究と同様になることが考えられる。そして、チームの部員数が指導者の選手との関わりや質に偏りを作っていることが考えられる。そして、自主性の高い選手は自主的に指導者にアドバイスを求めるため指導者との関わりが多くなり、P得点、M得点が高く示された。逆に、自主性の低い選手は自主的に指導者にアドバイスを求めないため指導者との関わりが少ないため、P得点、M得点が低く示されたことが考えられる。また、競技レベルが高い部活動における自主性の高い選手は、試合で勝つために、自主的に自身の技術力を磨くという意識が強いと考えられる。そして、指導者からよりよいアドバイスをもらうために、指導者と多くの関わりをもととする。一方、自主性の低い選手は、自主的に行動せず、選手自身から指導者に関わろうという意識が低いため、指導者との関わりが少ないことが考えられる。先行研究より、徳永は、競技力向上を目標にするためには、自分にとって何が課題かに「気づき」、そのためには何をすべきかを創造的に考え、積極的に行動する選手を育てなければならないと指摘している¹⁰⁾。このことから、競技レベルが高い部活動における自主性の高い選手は、自ら考え、行動していることが伺える。部員数が多く、かつ競技レベルが高いチームにおいては、選手の自主性の違いによって指導者のリーダーシップに対する認識が変わってくることを示唆された。

5. まとめ

Bチームにおいて選手の自主性得点とP得点、M得点の間に弱い正の相関関係が示されたが、その他のチームにおいては相関関係が示されず、全体で一貫した結果は得られなかった。Bチームと他のチームを比較したところ、Bチームの部員数が多くかつ競技レベルが高いことであった。そこで、チームの部員数とP得点、M得点の相関係数を算出した結

果、有意ではないが負の相関関係が示された。このことから、部員数が多く、かつ競技レベルが高いことが指導者の選手との関わりの量や質に偏りを作っていることが考えられ、部員数が多く、かつ競技レベルが高いチームにおいては、選手の自主性の違いによって指導者のリーダーシップに対する認識が変わってくることを示唆された。

文 献

- 1) 石井源信：ジュニアスポーツの現状と課題—心理学的観点からみたジュニアスポーツのありかた—。ゴルフの科学, **12**(1), 23-28, 1999.
- 2) 駒米勝利：「指示待ち」の子の長所・短所。児童心理, **51**(11), 1045-1049, 1997.
- 3) 松本卓三：10章 発達過程における不適応と問題像。発達と学習, 北大路書房, 京都, 167-184, 1992.
- 4) 石井源信：12章 スポーツと集団力学—スポーツ集団におけるグループダイナミクス—。杉原隆, 船越正康, 工藤孝幾, 中込四郎編, スポーツ心理学の世界, 福村出版, 東京, 165-181, 2000.
- 5) 松井三雄：スポーツマンのパーソナリティについて。体育の科学, **14**(9), 503-506, 1964.
- 6) 倉藤利早, 田島誠, 米谷正造：指導者のリーダーシップのタイプが選手の自主性に及ぼす影響。川崎医療福祉学会誌, **20**(2), 457-460, 2011.
- 7) 井上史子, 沖裕貴, 林徳治：中学校における自主性尺度項目の開発。教育情報研究, **21**(3), 13-20, 2005.
- 8) 三隅二不二：PM指導行動測定尺度。吉田富二雄編（堀洋道監修）, 心理測定尺度集Ⅱ 人間と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉, サイエンス社, 東京, 250-259, 2001.
- 9) 西口利文：少人数授業における教師と子どもの個別的関わり。学校心理学より少人数授業を考える, 教育心理学年報, **46**, 29-30, 2007.
- 10) 徳永幹雄：大学スポーツクラブと自主性・自立性。体育の科学, **38**(4), 261-265, 1998.

(平成23年5月23日受理)

The Relationship between Players' Independence and Their Assessment of Coaches

Risa KURATO, Makoto TAJIMA, Shozo YONETANI and Shuji MATSUEDA

(Accepted May 23, 2011)

Key words : assessment, independence, leadership, PM leadership action scale

Abstract

The purpose of this study was to examine the relationship between players' independence and their assessment of coaches. Participants were 220 players in 10 soccer clubs. The scale of independence consisted of self-control, originality, self-assertion, independent nature, judgment and initiative factors. The scale of leadership consisted of performance and maintenance functions. Results showed a high correlation between the independence and leadership scores of players in teams that had a large squad and a high competition level. Furthermore, there was a weak correlation between leadership scores and the number of players in a team. These results suggest that in teams with a large number of players and a high level of competition players' level of independence influences their assessment of leadership.

Correspondence to : Risa KURATO

Doctoral Program in Health Science

Graduate School of Health Science and Technology

Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-0193, Japan

E-Mail : w8511003@kwmw.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.21, No.1, 2011 95-101)